

# 序

ひどく体が重かった。押し込められた部屋には最低限の設備——ベッドなど——が揃そろっている。硬い地面で夜を明かす覚悟もしていたが、どうやら自分は思っていた以上に値が付くらしい。もちろん、あくまで“商品”としてだが。そんなこと、喜べるはずもない。

申し訳程度の窓から朝日が差し込む。とてもではないが、清すがすがしい気持ちになどなれなかった。鉄格子越しの光で爽やかになれる者のほうがきつと少ない。

ベッドから体を起こした。だが立ち上がる気にもなれず、寝直す気にもなれず、頭を抱えるようにして座り込む。はあ、と吐く息が白い。冬の半

ばだ。故郷よりは厳しくないはずなのに、それでも、寒い。

しばらくじっとしていると、体が震え出した。このままでは風邪を引くかもしれない。……いっそ死んだほうがましではないか、という考えが浮かんだ。自分は「商品」だ。誰かに買われ、物のように弄ばれて死ぬくらいなら、ここで終わったほうがいいのではないかと。

だが数十分後、たまらず毛布を被っている自分がいた。暖まるまでには時間がかかる。カタカタと歯が鳴る。これから何をされるのかを思うと恐ろしい。死ぬより酷い目に遭うかもしれない。死んだほうがましと思う未来が来るかもしれない。それでも自分は、みっともなく生きようとしている。

己を抱きしめるように毛布へくるまり、身を縮めた。ざわざわと背中<sup>あざ</sup>の痣<sup>あざ</sup>がうごめいた気がして肩が強張った。

自嘲が喉の奥に凝る。

幼馴染<sup>おとななじみ</sup>と袂<sup>たもと</sup>を分かち、ひとりここまで来たというのに、結局なにも掴め<sup>つか</sup>

なかった。それどころか、こんな目に遭っている。幼馴染のほうは幸運だったのか、薬も届いた。それのおかげで、命だけは長らえた。それなのに、自分とは言えば、尊厳まで失おうとしている。

タイミングが悪かった。そうだ、タイミングが悪かった。だがそんな言い訳は、慰めにすらならない。

痣が広がり、理性が削れていくのが怖かった。

痣に自分が塗り潰されていく。世界から自分が消えるくらいなら、泥をすすってでも生き延びたほうがいい——あの時は、たしかにそう思っていた。

けれど今、正気を取り戻してみれば、それが間違いだったと分かる。遠

い目で見れば最善が理解できるのに、自分にはそれを選び取る気概がなかった。今の苦しみを耐える意地がなかった。楽なほうへ逃げ出した。

賢しらに語ってみせても、結局は今から目を逸らしているだけなのだ。

彼だったらどうしただろう。国に残った幼馴染なら。

あいつは堅実なようできて、追い詰められると妙な方向へ爆発するし、変な運まで持っている。きっと上手くやっているのだろう。そもそも自分に送れるほどの薬を手に入れたのだから、心配の必要もないのかも知れない。

自分の現状を知られたくなくて手紙も受け取らずにいたが、今頃どうしているだろう。返信がないことに憤慨しつつ、真面目に心配もしているに違いない。「次に会ったら一発殴る」とでも言っている。

しかし残念ながら、自分に「次」はない。数日もしないうちに、誰か道

樂者の“持ち物”になるのだろうか。

「殴られる心配はねえな」

小さく笑った。狭い部屋にその声だけが虚しく響く。

視線を上げても、鉄格子が視界を縦に割るだけだった。下ろせば、薄汚れた床。どちらに目を遣っても、未来らしいものは見当たらなかった。ただ時間が、重い鉛のように<sup>よど</sup>澱んでいた。

# 入国

「はっ!? 十七歳!」

大声を上げたジンは、ルークにじろりと睨にらまれた。

場所は馬車の中。レオンの幼馴染おさななじみがいますというケヒタート——主に教国

と呼ばれるが——へ向かう途中だ。メルクアトルからは多少距離はあるも

の、クレイドナからメルクアトル、あるいはクレイドナからケヒタート

へ向かうのとは違い、山も森も越えずに済む。長く続く道なら、徒歩より

馬車のほうが早い。なによりジンたちは《華冠持イシュト・ラヴァルち》がひとり、その他は

《欠けたものレ》というワケアリ集団だ。一般の旅馬車に紛れるには面倒が

多すぎる。そんなこんなで馬車は、ルークの護衛で得た報酬とエドウィン

の《蜜葉》<sup>ネクトル</sup>を使って買った。

唯一御者の経験があったレオンが御者台に収まり、車内は他の三人。ちなみに内装はルークが改装してくれたおかげで、揺れが少ない。時間がなから応急処置だと言うが、充分に快適だった。

車内でという経緯か年齢の話になり、ルークの歳を聞いたジンが叫んだのが冒頭のそれだ。驚くジンに、ルークは唇を尖<sup>とが</sup>らせた。

「なんだ、そんなに驚くことか？」

「いや、その、なあエドウィン……？」

「ははは、私からはなんとも」

助けを求めてエドウィンを見るが、笑顔でそっと視線をそらされてしまった。

「なんだ……。……お前、僕のことを何歳だと思ってたんだ？」

「……十五かそこらかと」

「はあっ!？」

目を吊り上げるルークに、ジンは冷や汗をかいた。

十七ということは、つまりレオンの三つ下だ。頭の中でふたりを並べても、やはりそうは見えない。もともと元々レオンは歳より上に見えるとしても、ルークは幼い。立てばジンより頭ひとつ分ほど小さく、中身も、メルクアトルまで護衛した商会の息子——クリスと同じか、ほんの少し上くらいに見えた。クリスは十五と言っていたから、てっきりそれくらいだと……。

口に出さずともそんなことが顔に出たのだろう、ルークは真っ赤になつて怒り出した。ジンは「まあまあ」なだと宥める仕草をしつつ、懐の袋から飴玉あめだまを取り出して渡そうとすると、さらに顔を赤くする。

「~~~~~子供扱いするなっ! あと数ヶ月もすれば十八だっ!」



ぎゃん、と噛みつきそんな勢いで怒鳴る。暴れだしそんな剣幕に、ジンは早々に退避を決めた。飴の袋はエドウィンに渡し、馬車の扉を開ける。

ひゅうと冷気が入り込み、首をすくめた。ジンは器用に突起へ足を引っかけ、御者台へ移る。突然現れたジンを、レオンはさほど驚かず受け入れた。中の声が聞こえていたらしい。

ぶるり、と震えると、レオンが足元から毛布を取り出して手渡してくれた。ありがたく巻き付け、一息つく。促されるまま、さっき聞いたばかりの衝撃を共有した。

「なあ、レオンはルークの歳はいくつだと思う？」

「……十四とかか？」

十四！ ジンの予想より小さい。それにジンはくっくつと笑って答えを教えた。

「十七歳だとさ」

「はっ？」

馬を操りながら目を見開いて驚くレオンを見て、ジンは苦笑する。

「俺は十五だと思ってたって言ったら怒られた」

「……なるほど」

驚きが尾を引いているのだろう。レオンはどこか呆然<sup>ぼうぜん</sup>としている。

だが気持ちには分かる。十六で多くの国が成人を迎え、十八にもなれば未成年の国を探すほうが難しい。

そういう世界で、ルークはあと数ヶ月で十八だと言っていた。もうすぐ大人だ。どう見ても『青年』より『少年』が似合うのに。

「そうか、十七か……なら痣<sup>あざ</sup>の進行度は俺と同じくらいだな。いや、彼は頻繁に《蜜菓》を飲んでいたことを考えると、進行は早いくらいだろうか」

レオンの声が翳<sup>かげ</sup>る。ジンは、彼がどこへ思考を落としたのか察した。

「貴方に会う前に急に痣が増えたと言っていただろう。俺も少し遅れてだが、急に増えた時期があった。だがアイツには何もなかった。それで随分とアイツに心配を掛けたんだが……」

レオンの背中がわずかに丸くなる。絞り出すような声が、ジンの耳<sup>みみ</sup>朶<sup>たぶ</sup>をかすった。

「……俺と別れた後に、同じようにアイツにも痣が増えていたらどうしよう」

苦悩の声音は、この旅で何度か聞いてきた。

エドウィンやルークの前では平静を装うが、ジンの側では時折こぼす。夜、眠りにつく直前だったり、供給を終えた最後だったり。時たま、ぼそりと『アイツは大丈夫だろうか』と不安を口にする。

『アイツ』が誰を指しているのかは言われなくとも分かる。旅の目的そのものだ。冒険者ギルドの情報では無事だという。その情報を得た直後は安定していたのだが、それから時間が経って不安がまた顔を出したらしい。痣は突然進むことがある。国をまたぐならば、どれだけ急いでも距離がある。その距離が恐ろしいのだろう。目的地が近づくほど、揺れる瞳を見る頻度が増えた。

エドウィンはきつと気付いている。休憩中、レオンが消えかけた時に、さりげなくジンの手が空くよう誘導するのはいつもエドウィンだった。

ジンはレオンの背を撫なでた。慰めの言葉は選べなかった。ジン自身、《蜜》<sup>ネク</sup>がなく苦しむ姿を見ている。あれを知っていれば、軽々かるがるしく「大丈夫だ」とは言えなかった。

筋肉の付いた広い背が、今だけは小さく見えた。馬車の中は、いつの間

にか静かになっていた。

「すまない……」

「いいや」

謝るレオンに、ジンは首を振った。謝る必要はない。不安になるのも当然だろう。きっと家族と呼んでもいいほど、幼馴染が大切なのだ。

ふと、自分も記憶を失う前には、そんな存在がいたのだろうかと思った。遠く離れた先で、無事を願うような誰かが。

一瞬、脳裏に影が過ぎった気がした。だがそれを掴む前に霧散する。それでも釈然としない感覚だけが残る。

それを追おうと意識を向蹴るよりも前に、レオンに手を握られた。彼は手綱を片手に持ったまま体を捻り、まるでさがるようにぎゅうと握りしめてくる。言葉はなかった。噛み締めた唇の隙間から、ふう、と吐き出す息

が白くたなびく。

皮の手袋越しで体温は分からない。それでも握られた形から、硬く、ごつごつとした手が想像できた。何度も繋つないだ手だ。手袋に隔てられたそれでは《蜜》は得られないが。

ジンも握り返し、なんでもないふりで笑った。

「なあ、俺に馬の操り方を教えてくれないか？ お前以外にも知っておいたほうがいいだろう」



目的の街に着いたのは、日が沈む直前だった。出来得る限り馬車を飛ばし、どうにか門が閉まる前に滑り込んだ。

ケヒタート——教国はクレイドナともメルクアトルともまた異なるたたずまいだった。クレイドナは木の家が多く、メルクアトルはレンガが目立っていた。対する教国は、“白い石”だった。それも色を揃えているのか、道から建物まで白く染まっている。メルクアトルの書誌館ライブラリを思わせるが、あちらが芸術品なら、こちらは生活の匂いがある。民家も並び、書誌館と比べていくらかとっつきやすかった。

それでも一面が白いその街は、十二分に圧倒されるものがあつた。

だが景観に見惚とれたのは一瞬だった。馬車を預ける宿を決めるのもそこそこ——なにかの催しが開かれるらしく、結局は宿を見つけることができず、馬だけ預けてきたのだが——、冒険者ギルドへ足を急がせた。メル

クアトルのギルドからの手紙を渡すと、よどみなくギルド長へ取り次がれた。

案内されたギルド長の部屋へ、いつかのように入る。あの日と違うのは、ルークが加わっていることだ。

ギルド長は応接用の机の横で立ち、ジンたちを迎えた。歳は四十ほどか。にこにここと笑う顔には薄い皺しわが刻まれている。スリムな体躯たいく、後ろで縛った長い髪、日焼けのない白い肌に柔和な表情。荒くれ者の風情だったメルクアトルのギルド長とは違い、鍛えてはいるのだろうか、あまり冒険者というイメージが湧かない。

案内したギルド員をねぎらうと、ギルド長はジンたちに席を勧めた。彼ひとりに対して、こちらは四人。少々窮屈しょうきよくさを感じつつも、ジンたちは腰を下ろす。



次いで入ってきたギルド員が飲み物のカップを置いて出ていくと、ギルド長はにこりと笑って口を開いた。きっちり留められたシャツの袖口のボタンが鈍く光る。

「まずは遠いところからお疲れさまです」

そうして彼はアシュトンと名乗った。ジンたちも名乗り返すと、アシュトンは満足そうにうなずく。

「——さて、こちらの手紙を読ませていただきました」

メルクアトルのギルドからの手紙を掲げる。

「特定の構成員の情報を知りたいとか。それも冒険者ギルドとして保護している構成員のものを。……本来ならばその手の願いは却下するところなのですが、こちらの手紙がありましたから……」

ならば早くその情報を、とレオンが身を乗り出す。だがアシュトンは目

で制し、「それで——」と続けた声の質が変わった。

「ギルドの構成員の情報を得たいとはどうしてです？」

笑みの形は崩れない。だが瞳の奥だけが鋭い。冷え込んだ空気に、ジンたちは息を詰めた。

「当方にはギルドの構成員の秘密を守る義務があります。いくら他地方のギルド長の手紙があらうと、はいそうですかと頷くわけにはいかないんですよ」

言葉の終わりに、また笑んだ。友好ではなく、威嚇の笑みだった。

怯んだジンたちをよそに、レオンがいち早く声を張った。

「俺はアイツの幼馴染だ！」

クレイドナで別れてから薬を飲んだかどうかも分からない、無事かどうかだけでも知りたいのだと訴える。しかしアシュトンの目は冷たかった。

それで？　と言いたげな視線に、ジンは奥歯を噛む。ここで躓くとは思わなかった。手紙を渡せばすぐ教えてもらえるものだと思っただけなのに。感触が芳しくないどころではない。敵を見る目だ。

レオンが憤った声を上げ、アシュトンは冷たくあしらう。困惑ぎみに視線を彷徨さまよわせていると、ずっとエドウィンが手を上げた。言い合っていたふたりもそれに気付き、口をつぐむ。

「申し訳ありません、そちらの手紙を読ませていただいても良いでしょうか？」

「……は？　それは必要ですか？」

レオンに注力していたアシュトンが、不意を突かれたような顔をした。訝いぶかしげにエドウィンを見やり、手元の手紙に視線を落とす。エドウィンが「別に変なことはありませんよ」と微笑むと、眉をひそめながらも手紙を手

渡した。

エドウィンは丁寧な封筒から手紙を取り出し、静かに読む。読み終えらると同じように封筒へしまい、居住まいを正してアシュトンを見た。誰かがこくりと唾を飲む。

「……どうやら誤解があるようです」

一瞬調子を崩したアシュトンだが、すぐに立て直し、片眉を上げる。

「誤解？」

「ええ、あなたは私たちをどういった集団だと？」

「……………」

答えないアシュトンに、エドウィンは似た形の笑みを作った。底知れぬ笑みを。

「おそらくですが、その彼——レオンの幼馴染を連れ戻しに来た何者か

とも思っていらっしゃるのでは？」

「はっ!？」

「……」

レオンが驚きの声を上げ、アシュトンが沈黙した。押し黙ったまま笑顔を崩さない。肯定だろう。

「どうということだ？」

思わず声を上げたジンに、エドウィンは困ったように笑った。

「どうやらこの手紙には情報が不足していたようです」

「私たちがええと、そう、『ヴェステル』であることも、君が『メーティス』であることも書かれていませんでした」

「……はっ？」

エドウィンの言葉に、アシュトンが目を見開く。

ヴェステルは《欠けたもの》であるかつての勇者で、メーティスとはその勇者と共に戦った《華弁持ちラヴァル》だ。冒険者ギルドでは隠語として、それぞれ《欠けたもの》と《華弁持ち》を表す。

ジンも一言断って手紙を読ませてもらった。横からレオンが覗き込んできたので、読みやすいよう傾けた。

簡単な挨拶と、ジンたちが尋ねてくるから相手にしてやってほしい、彼らは最近出回り始めた《蜜薬》の関係者だ、ということだけが書かれている。読み間違いないか目を走らせても、ジンたちの正体——《欠けたもの》や《華冠持ち》であることは伏せられていた。

「憶測ですが、メルクアトルのギルド長は私たちの正体を手紙に書けなかったために、このような内容になったのではないかと思います」  
そわそわした様子 of ルークに手紙を渡しながら、ジンも頷く。

ギルドに所属した《欠けたもの》の存在は秘匿され、その存在を知れるのはギルドの長だけ。ジンたち自身が手紙を運ぶとはいえ、第三者が目にする可能性のあるものに書けるはずがない。

エドウィンの言葉に、アシュトンは困惑した。先程までの氷のような空気は消え、ただ訳が分からないという顔で視線を揺らす。

「あの、ということでしょうか？　つまりあなた方は、ヴェステルを追う者たちではないということでしょうか……？」

その言葉で、エドウィンの推測が当たっていたと分かった。ジンたちはギルドが守るべき秘匿対象に接触しようとする危険人物——そう見られていたのだ。

しかし、なぜそんな誤解を……？

さすがギルド長というべきか、数拍置いて混乱を鎮めると、真面目な顔

で説明を始めた。

最近になって《欠けたもの》が喉から手が出るほど欲する《蜜薬》とともに、なぜかある《欠けたもの》の情報を得たいという問い合わせが来たのだという。明らかに怪しい。そんな貴重な薬をばらまいてでも手元に置きたい何かが、その《欠けたもの》にあるのだとアシュトンは考えた。

《欠けたもの》が冒険者ギルドに登録する理由は様々だ。さまざま国の横暴に疲れ果てて逃げた先がギルドだった者もいれば、暮らしていた村で痣を理由に弾かれ、頼る場所がなくなった者もいる。共通しているのは『他に行き場がない』こと。そして中には、金持ちの《華弁持ち》に飼われ、逃げ出してきた《欠けたもの》もいる。

《蜜薬》をばらまくほどなら、そういう背景があるのだろう——アシュトンはそう踏んだらしい。始めは冷たく振り払うつもりだった。だが、その



『ある《欠けたもの》』は危険な状態にあったという。苦渋の決断で情報を流し、《蜜菓》を得たのだと。

つまり彼の冷ややかな態度は、ギルドの構成員を守ろうとする必死さの裏返しだった。

互いにほとんどすべてを晒し、ようやく相互理解が進むと、アシュトン  
は頭を抱えた。腕にブレスレットでもしているのか、シャラリと場にそぐ  
わない涼やかな音がしたのが、少しだけ気になった。

「まったく、エディアスさんは……いつも言葉が足りない」

特大のため息と呻きは、何度か被害に遭っている口ぶりだ。ジンはメル  
クアトルのギルド長を思い出し苦笑した。たしかに事務処理が苦手そうだ  
った。現場叩き上げ、という様子だったし。

アシュトンは切り替えるように背筋を伸ばし、丁寧に頭を下げる。

「勘違いをしていて、申し訳ありませんでした」

「いいえ、誤解が解けたようで良かったです」

皆を代表してエドウィンが答える。その隣で、レオンが焦れたように口を開いた。

「それで、イザークの奴は今どうしているんだ？」

「はい、彼ですね。それが、その……」

アシュトンはいいよんだ。それに、さっとレオンの顔色が変わる。

「まさかっ……！」

「いえ！ いえ、葉がありましたので痣は問題ありません。その、ですが

――」

次にアシュトンが口にした内容は、ジンたちを驚愕きょうがくの渦に叩き落とした。



# ギルド

「はあっ!? オークション!？」

意味がわからない、と叫んだのはレオンだった。ジンも思わず固まる。

「ええ、イザークさんは今、オークションに掛けられています」

気まずそうに視線を逸しながら、ギルド長——アシュトン——は同じ言葉を繰り返した。理解が追いつかないジンたちの中で、いち早く我に返ったのは、意外にもルークだった。

「それ、もしかして、博覧会……?」  
エ  
ル  
ム

「知っているのか？」

「ああ、教国の有名なオークションだ。年に一度、確かこの時期だった」

だから宿がどこもいっぱいだったのか、と腑に落ちたようにルークが頷く。皆の視線が集まったが、ルークは面倒そうに首を振り、説明役を押しつけるようにアシュトンを見た。アシュトンが小さく頷き、口を開く。

「ええ。一年に一度この時期に一週間開かれる国主催のオークション、それを博覧会と言います」

硬い表情のまま、アシュトンは続けた。

「表向きは宝石や装飾品、魔法具など。しかし裏もある。そこでは世のあらゆるものが出品できます。盗品はもちろん、形のないものまで。……たとえば処女や童貞など。——そして、人もまた」

青白い顔で言い切ったアシュトンの言葉を継ぐように、ルークが吐き捨てる。

「たまにいます。鎖なしの《欠けたもの》を飼いたいという《華弁持ち》

が。国にとって《欠けたもの》は資源だ。だから多少ならともかく、度を越えた横暴は許されない。だが国が困っていない鎖なしなら好きにできると考えるものがある。……他にも《華弁持ち》じゃなくても、大富豪が私兵兼私娼<sup>ししょう</sup>として困りたいとか言い出すらしいけど」

嫌悪の滲<sup>にじ</sup>む声だった。ジンがちらりとアシュトンを見ると、彼も肯定するように頷く。それにレオンが噛<sup>か</sup>みつくように声を上げた。

「だ、だが、どうしてイザークはそんなことに……？」

「それが――」

アシュトンは歯切れ悪く唇を噛み、しかし覚悟を決めたように首を振って語り始めた。

エドウィンの薬が届いた時点で、イザークの症状は最悪の一手前だったという。いつ発作を起こして終わってもおかしくない。そんな中で彼は

決断した。自分を売ってでも、生き延びると。

教国のオークションでは、《欠けたもの》が出品されれば大金で買い上げられることがある。どんな相手が買うかは分からない。だが《華弁持ち》でなくとも、金を出して買った商品がすぐ壊れることを望む主人はいない。ならば無理をしてでも薬を手に入れるはずだ——そう踏んだのだ、と。

そして、彼がオークションの手続きを終えた後で、ジンたちからの薬がギルドに届いた。薬は確かにイザークへ渡ったが、国が主催するオークションでは簡単に出品を取り下げられない。しかも、すでに《欠けたもの》だと明かしてしまっている以上、たとえ取り下げられても国から逃げるのは容易ではない。

「ですから、イザークさんはあなた方の薬のおかげで症状は落ち着いたそうですね、その……会うのは難しいかと……」

沈痛な表情でアシュトンが言った。

出品物はオークションが始まる一週間前には一箇所に集められる。人間も例外ではない。イザークもまた、国の施設に閉じ込められているはずだという。

「お力になれず申し訳ありません」

アシュトンは頭を下げた。

もしジンたちが《欠けたもの》でも《華冠持ち》イシュト・ラツアルでもなく、薬をばらま

けるほどの富豪だったならば、話は違ったのかもしれない。結局、金さえあれば、レオンの幼馴染おさなじみは救える。

そう考えると、アシュトンの最初の威圧的な態度も機密保持だけではなく、こちらが信用に値するかを測っていたのだろうと思えた。もし「有象無象に買われるよりはマシな主人」と判断されていたなら、もっと別の道



が用意された可能性もある。

だが残念ながら、ジンたちはせいぜい小金持ちだ。エドウィンの《蜜葉》ネクトルを少しづつ流通させようとしているが、値付けはかなり良心的。報酬のたぐいの金も、馬車や旅道具を揃えた時点ではほとんど残っていない。

沈痛な沈黙が落ちる中、アシュトンは「できることは限られるが、それでも可能な限りの手助けをする」と言った。イザークを取り戻せるほどの金はないが、必要なら貸そう、とも。この国にいる間の住む家も手配しよう、と。

流石に手厚すぎる。どうしてそこまでしてくれるのかと訊ねると、彼は薄く微笑んだ。今までの仮面とは違う、彼本来の笑みのようだった。

「私の——そう、知り合いにも《欠けたもの》がいてね。君たちはこれからも薬を下ろしてくれるのだろうか？ その礼かな」

その後ジンたちはいくつか確認をされ、アシュトンに見送られて冒険者ギルドを後にした。



外はもう日が沈み、家々いえいえの明かりがぼんやりと窓から漏れていた。ランタンを片手に、地図の示す通りに進む。ジンたちが拠点とする家は街の外れにあった。宿に預けた馬車と馬は、金を払えばギルド側で世話をしてくれるというので任せた。宿に置いてきた荷物は後で届けてくれるらしい。

地図の終点には白いこぢんまりとした家があった。小さな庭は手入れが行き届き、家の中も使用感はあるもののきれいに整えられている。

備え付けの魔法具に明かりを灯し、簡単に見回りを終えると、ジンたち

は自然とリビングに集まった。

キッチンには食器類こそあるが、茶葉はなく、当然食品もない。仕方なしに魔法具の袋から保存食を出し、飲み物は裏手の井戸水で済ませた。

話し合いたいことは山ほどある。だが、まず腹を満たすのが先だ。これはエドウィンの教えでもある。疲れている時、栄養を取らねば頭が働きませんよ、と。

皆ほとんど無言で食事をした。唯一ルークが質素な食事に嫌そうな顔をしたが、空気を読んだのか何も言わなかった。

固いパンと干し肉を胃に落とし、水をすすする頃になってようやく、レオンが口を開く。衝撃の内容と、これからどうするべきか。そこを切り口に、ぽつぽつと会話が始まった。

「その幼馴染くんを競り落とすには、具体的にどれくらいのお金が必要な

んでしょう?」

「人間の値段はピンキリだ。馬一頭分の金で買える奴もいれば、小さな城が建てられるほどの奴もいる」

カップに口を付けながら言うルークへ、なんでそんなことを知っているんだという視線を向けると、彼は「そういうのを嬉々<sup>きき</sup>として喋<sup>しゃべ</sup>るうるさいのがいたんだ」と肩をすくめた。ジンが城の闇に気圧されていると、エドウィンが淡々<sup>たんたん</sup>と訊ねる。

「普通の人間ではなく、『欠けたもの』だったらどうでしょう?」

「……能力と、あとは容姿だな。そのイザークとやらの能力は?」

「俺と大して変わらないと思う」

「そうか。城に重宝されるほどじゃないが器用なタイプ、ってところかなら、容姿は?」

「……悪くはない」

レオンは複雑そうに答えた。なぜ俺はこんなことを言っているのだ、という表情だ。まあ、ジンだって家族同然の幼馴染の容姿を問われたらそんな顔になってしまふかもしれない。

「なるほど……。僕も詳しいわけじゃないが、下級のきれいな顔の子を買ったと言っていた奴は、たしかこれくらいと言っていたな……。逆算すると……。これくらいになるんじゃないか」

示された数字に絶句する。すぐに集まる額ではない。

ジンは、浮かんだ疑問をルークに問うた。

「……ちなみに、その買われた子はどうなったんだ？」

「メルクアトルでは聖<sup>せい</sup>瘡<sup>しや</sup>者は、いわば国の持ち物だ。必ず国に登録しなきゃならない。だから登録はされてたはず。でも、実質はその《華弁持ち》

の専属みたいなもので、ほとんど城にも顔を出してなかったと思う。そいつが家で何をしていたかは知らない」

口元を歪めたルークが、“何をしていたか”に答える代わりに不快さを吐き出す。ジンたちの顔色は揃って暗くなる。

「その、もしもですが、レオンくんや私がオークションに出た場合はどうなるのでしょうか？」

エドウィンの問いに、ルークは嫌そうに眉をしかめたが、必要だと判断したのだろう。ぎこちなくも答える。

「レオンは《欠けたもの》としての能力は高くないが、護衛としては優秀だ。それを鑑みると、その子の倍までは出ないくらいじゃないか。で、エドウィンさんは能力はかなり高いが、年齢もそれなりだ。だから少し落ちるかもしれないな。それでも、三倍から四倍くらいか？」

「それではルークくんでは？」

「僕？ 僕は能力もいいし、容姿も、まあかなりのものだから、それこそ城の値段は付けられると思う」

ルークはふふんと胸を張った。ジンたちはツツコむことなく黙り込む。

己の容姿を「かなりのもの」と言い切れる胆力はすごい。確かにルークは人形じみた美しさで、間違っ**て**はいない。城にいた頃は虚勢も混じ**って**我儘に振る舞**って**いたが、旅に出てからは言葉遣**い**が僅かに幼くなり、ふとした拍子に素が覗く。自己陶醉というより、客観的に値札をつけて誇**つ**てみせるような調子で、否定もしづら**か**った。

だがルークはジンを見て、少し不満げに唇を尖**ら**せた。

「だけど、そんなことを言うなら、ジンの方がもっとすごいと思う」

ジンの服の下、ちょうど花の痣**あざ**がある辺りを見て言う。

「ただでさえ国から逃れる《華弁持ち》なんて今までいなかったのに、華をもっているんだ。……値段を付けるなら、国を買えるレベルになるんじゃないか」

「僕は話を聞いてただけで、素人だから結構適当だけど」と付け足されても、その自分の思考を軽く飛び越える話に、ジンはうまく反応できなかった。国？ 国……？ と首を捻る横で、エドウィンが眉を寄せ、息を吐く。

「つまり、多少前後しても最低限この程度は必要だということですね」

メモとして紙に書かれた数字に、暗雲が垂れ込める。今まで稼いだ額よりもゼロがいくつも多い。ギルド長がある程度の金は貸せると言っていたが、それでも足りないだろう。

だが、何もしないという選択肢は存在しない。



「……ギルドに薬を卸すのは、一旦止めさせてもらいましょう。あまりやりたくはないですが、裏で取引した方が何十倍も高くなります」

難しい顔でエドウィンが言った。彼の作る《蜜薬》は、普通と比べれば破格に安い値段でギルドに卸している。材料費と手間賃と、真面目に薬を作り続けば普通の暮らしができる程度の利益が出るような値段だ。

それは《蜜薬》をできる限り多くの《欠けたもの》へ届けたいからで、ジンもそれに賛同してきた。裏で出回る恐ろしく高いそれらと比べれば、頭を疑うくらい良心的だ。

「ここは教国です。貴族に飼われる《欠けたもの》も多い。つまり、その《欠けたもの》のために《蜜薬》を求める貴族もまた多いということです。彼らに買ってもらいましょう」

ひんやりとした声に、貴族への侮蔑が混じっていた。いつも穏やかに笑

う顔が今は不機嫌に歪んでいる。随分と怒っているらしい。珍しい表情だった。

「それなら、僕は魔法具を作って売ろう。着の身着のままで来たから道具がないが、道具さえあれば数日でそれなりのものを作れる」

「俺は……」

どうすれば、と続けようとしたジンの言葉は途中で遮られた。

「ジンは、私の手伝いをしてください。《蜜》<sup>ネク</sup>を貰<sup>もら</sup>わなくてはなりませんから」

「……僕も。たぶん結構魔力を使うはずだから、《蜜》を貰えると助かる」

「わ、分かった」

こくこくと頷く。

そんな三人を見て、レオンは深く頭を下げた。

「すまない、恩に着る……！」

万感のこもった声だった。言葉の端が滲んでいる。

ジンはレオンと契約をしている。ジンの記憶を取り戻す助けをしてもらう代わりに、幼馴染を探す、と。だからジンが彼の幼馴染を助けようと動くのは契約の範囲内だ。

けれどエドウィンとルークは違う。ジンという《華冠持ち》を介して、たまたま出会っただけの集まりだ。本来なら決して交わらなかった相手同士が、ただジンという生命線を挟んで繋<sup>つな</sup>がっている。

それでも、皆、共に旅をした。これからもしばらくは旅をするだろう。

赤の他人と呼ぶには近く、身内と呼ぶにはまだ短い。それでも共同体とでも言うべき、奇妙な一体感が芽生えていた。それこそ、こうして面倒事に手を貸してやりたいと思う程度の。

彼らは口々に言葉を返す。

「私も同じ《欠けたもの》として他人事ではないので」

「……僕も、あんまりいい気分しないからな」

「俺は元々そういう契約でもあったし、それがなくてもレオンの幼馴染だ。もちろん手を貸すさ」

レオンの頭はさらに下がった。肩が震えるのをジンが叩いて慰める。ぽたりと落ちた雫が床を濡らした。

恵まれた体躯を丸めるように震える男を見る。この男が助けたいと望む相手を、助けてやりたかった。

ジンたちは言葉なく目を合わせた。

———どうにかして彼のひとを救い出すのだ。



己の吐息の音だけが聞こえる、しんと静かな執務室で、ギルド長——アシュトンは先程やってきた冒険者たちのことに思いを馳せた。

一人の《華弁持ち》<sup>メーテイス</sup>に、三人の《欠けたもの》<sup>ヴェステル</sup>。ただでさえ国に縛られない《華弁持ち》がギルドにいることは稀有だ<sup>けう</sup>というのに、《欠けたもの》たちは《華弁持ち》に不本意に従わされているのではなく、確かな絆<sup>きずな</sup>で結ばれているようだった。まるで本当に賢者と勇者のそのように。

昔——それこそかの勇者が生きていた時代は、今ほど《欠けたもの》が国によって厳密に管理されていたわけではなかった。というより、そんな暇はなかったのだ。その時代は今よりもずっと魔獣の数が多かったと言わ

れている。

国は腹を肥やして権力に酔う前に、国土を荒らし、時に国さえも滅ぼす魔獣たちと戦わねばならなかった。そんな時代には、いつか凶器に変わるとしても強い力を持つ《欠けたもの》が必要だった。

だが勇者と、そして賢者が、人間には敵わないだろうとされていた強力な魔獣どもを倒し、血の匂いを遠ざけて人類を安寧へと導いた。そうなる、と、平和な時代に過ぎた力を持つ者は疎まれ始める。《欠けたもの》<sup>兵器</sup>は《欠けたもの》<sup>バケモノ</sup>へと呼び名を変え、国は《欠けたもの》を、そしてそれに伴い《華弁持ち》を管理するようになった。

そんな中で、冒険者ギルドが《欠けたもの》と《華弁持ち》について国の不可侵を貫けるのは、賢者のおかげだと言われている。未来にこうなることを予想して先手を打ったのだ。そして代々ギルド長<sup>だいたい</sup>だけに伝わる、彼

の人の在りし日を綴った資料に残された言葉がある。《欠けたもの》と《華弁持ち》に選択の余地を与えたい——そう語った賢者の言葉だ。

——そしていつの日か、自分のような《華冠持ち》イシュト・ラヴァルが現れる、その時のために。

彼の人は、そう言ったのだという。

勇者は強大な力を持つ《欠けたもの》だった。そして賢者は歴史上彼以外存在しないとされる五つの花弁を持つ《華弁持ち》ラヴァル——《華冠持ち》イシュト・ラヴァル。その彼が未来に自分と同じ存在が現れると予想した。

だが、彼の人がいくら冒険者ギルドに常人と異なる存在の逃げ道を用意したとて、《華弁持ち》が逃れる方法はほとんどない。それは《欠けたもの》とは異なり、《華弁持ち》は生まれたときからその身に花弁の痣を持つからだ。そしてそれが通常ならありえない複数の花弁となればどうなるか。

賢者の再来として、普通の《華弁持ち》以上に大々的<sup>だいたい</sup>に国に迎えられ、国の宝として——有する価値ある交渉の材料として担ぎ上げられる。そうしたなら、赤子の時からかくあれと教育された《華冠持ち》が、国を裏切つて冒険者ギルドに属することなどあるだろうか？——しかし。そう、しかし。

——仮にも「賢者」と呼ばれる者が、そんなことを予想できなかったのだろうか。

アシュトンはそれがずっと疑問だった。彼の人にはこちらには分からない抜け穴——《華冠持ち》が国に属しないと考える、なにかを知っていたのでは。

（まさか、な……）

脳裏にひとりの男が浮かぶ。黒目黒髪の、雰囲気のある男。先程顔を合



わせた、《華弁持ち》だという男だ。

ここ数年、にわか騒ぎ出した魔獣たち。さながら次なる混沌こんどんの兆しのように。

そしてまるで湧いて出たように、冬の始まりから流通し始めた《蜜葉》。複数の《欠けたもの》を養ってなお、《蜜葉》にするだけの《蜜》を生み出せる。彼は果たして通常の《華弁持ち》か——？

アシュトンは無意識に二の腕へ手を伸ばしかけ、意識してそれを留めた。密かに息を吐き、こわばる指を開く。

過去の資料が正しい保証はない。後の者によって歴史が誇張されることも、詐称されることも十分にありうる。《欠けたもの》の勇者と《華冠持ち》の賢者は結ばれた後、互いに普通の人間——《欠けたもの》でもなく、《華冠持ち》でもなくなった——などという眉唾の伝承を残す資料すらあ

る。つまり伝承はあくまで伝承であって、賢者が本当に「後の《華冠持ち》のために」などと言った保証はない。

いずれも憶測の域を出ない。それなのに自分らしくなく熱くなってしまったのは、かつてのことがあるからか。

アシュトン は袖に隠れて見えないブレスレットを、服の上から握った。己の熱を吸って温かいそれは、ある人が贈ってくれたものだ。主と従を結ぶためのそれではなく、特別な意味を持つ者へ、と。彼のおかげでアシュトンはここまで生き延びた。彼の人は失われてしまったが、若い彼らとは違って歳をとったアシュトンは、そこまで急速に毒が回らない。彼らが駆け足だとすれば、アシュトンのそれは足の萎えた老人の歩みのようなものだ。そう、厳しいここでも生きていけるほどに。

緩く頭を振る。過去を振り返っている時間はない。泥沼へと沈もうとい

う若人がいるのだ。ギルド長としてはあまり褒められたものではないかもしれないが、彼らよりも長く人生を生きる先達として、なにか手伝ってやれればと思う。

アシュトンはゆっくり瞬きをすると、普通よりも優秀とよく言われる頭を回転させ始めた。